

【図書紹介・資料紹介】『〈私〉の誕生 生後2年目の奇跡Ⅰ：自分を指差す、自分の名前を言う』 著者 麻生 武

山下, 智也  
北九州市立大学

<https://doi.org/10.15017/6796412>

---

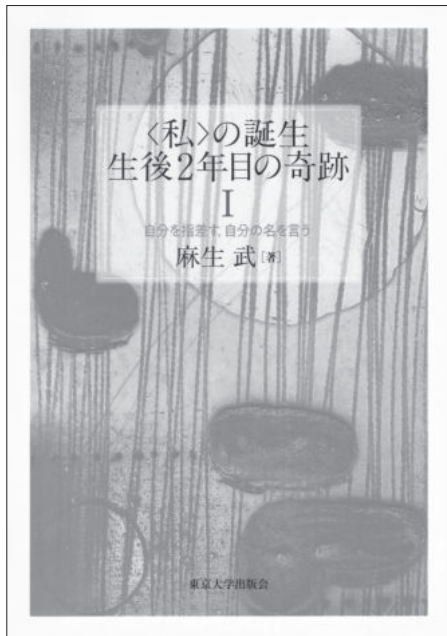
出版情報：生活体験学習研究. 22, pp.49-52, 2022-07-30. The Japanese Society of Life Needs  
Experience Learning

バージョン：

権利関係：

# 『〈私〉の誕生 生後2年目の奇跡Ⅰ — 自分を指差す、自分の名前を言う —』

著者 麻生 武



本書は、著者自身の子どもであるUくんの、生後2年目までの（Ⅰ巻では生後1歳10ヶ月までの）「日誌的な観察データ」を元にした、〈私〉の誕生の奇跡／軌跡が描かれた一冊である。ただ観察記録のみが記されているわけではない。先行研究との対話から本書独自の問いや分析の視点が丁寧に整理された上で、それを凌駕するほどの膨大かつ説得力のある観察記録（400字原稿用紙6105枚）から抽出されたエピソードが、躍動感をもって綴られているのである。

奇しくも私自身はUくんと同い年であり、さらには現在乳幼児の子育て真最中ということもあってか、300ページを超えるボリュームがあるにも関わらず、親近感を持ちながら一気に読了することができた。Uくんの生きる姿に笑みがこぼれることもしばしばあり、Uくんの豊かで確かな育ちに勝手に伴走させてもらえた清々しい気分である。我が子の育ちへの自身の関わりやまなごしを省察する貴重な機会にもなった。

ところで、本書を本学会誌の図書紹介で取り上げたのには一つの意図がある。それは、「どのように現象を記述するか」という建設的議論の喚起である。

実践者も研究者も「子どもの生活体験」という現象に向き合うわけであるが、本書のアプローチは“生活体験の本質を損なわない形での掬い取り方”の優れた一例として大きな価値があると考えられる。本書の紹介を通して、私たちが生活体験を綴る際のヒントになればと期待している。

さて、本書の章立ては以下の通りである。

- 序章 「自分」とは何か
  - 第1章 生後1年目、「身ぶりからことばへ」
  - 第2章 ことばの世界へ  
(1歳0ヶ月0日～1歳2ヶ月30日)
  - 第3章 人称的世界へ  
(1歳3ヶ月0日～1歳5ヶ月30日)
  - 第4章 人称的世界の開花Ⅰ：「自分の名前」と自己意識  
(1歳6ヶ月0日～1歳8ヶ月30日)
  - 第5章 人称的世界の開花Ⅱ：広がる内界と外界  
(1歳6ヶ月0日～1歳8ヶ月30日)
  - 第6章 新たな「自己」の出現  
(1歳9ヶ月0日～1歳10ヶ月30日)
- （\*以降はⅡ巻に続く）

以下に、著者の言葉を借りながら、概要を示していきたい。

まず序章は、「『私』とはいったい何だろうか？」という問いかけからスタートし、「私」という一人称の不確かさや、「呼びかけ」と「名指し」の違いが論じられるなど、本書を読み進める上での土台が固められる。その過程では、「子どもの目から見ると、自分の名前はどのような意味を持っているのだろうか」、「自分の名前を口にするようになるときいったい何が生じているのか」、「子どもは『自分』の名前を、何の名前として受け入れるのだろうか」等といったように、本書のテーマが多様な問いの形で散りばめられている。子どもが自分の名前を受け入れ、自分から発するようになる過程の不可思議さ・凄さを、「『ポチ』と呼ばれていた犬が、自分で『ポチ』という声を出し始める」という例えで巧みに表現しており、そのような論述の積み重ねの中で、読み手はいつしか本書の関心事に自然と誘われていく。

第1章は、本書の最大の特徴とも言える「日誌観

察法」の解説から始まる。その背景に「生活世界をとらえようとする視点」や「関係論的な視点」があることも確認された。日誌観察法と聞くと、子どもの発達を日誌的観察によって理論化したピアジェが連想されるが、本書では、ピアジェに欠けていた「子どもの社会性の発達やコミュニケーションの発達」も含め、子どもの育ちを丸ごと捉えようとしている点が非常に興味深い。そして、第2章以降の「生後2年目の探求の準備」として、著者の過去の知見を元に、生後1年目の特徴である「①子どもが『他者』とともにそれを知覚し認識する、『共同化された対象世界』が出現すること」、「②『自己』と『他者』とを同型的なものとして組織化する新しい身体図式が誕生すること」、「③子どもの中に『他者』のように有能たろうとする欲望が生まれること」を、Uくんのエピソードを用いながら臨場感をもって提示している。もちろんこれら3つの特徴は「準備」段階であり、生後2年目においてこれらが拡大されていくことになるわけだが、「生後1年目の終わりに基本的に新しい『自己』が生まれている」のである。

第2章では、『ことば』がコミュニケーションや思考の媒介物として誕生してくる様子をリアルに描き出すことを目的に、1歳0ヶ月0日から1歳2ヶ月30日までの時期の多様なエピソードを元に論が展開されている。従来の言語研究や発達研究では、子どもが親をどのように理解しているか等を捨象してきた点を課題に挙げ、親という存在が「子どもにとって実に複雑な多面的な存在」であるかを、1歳0ヶ月代のUくんと父親（著者自身）のエピソードから多様に描き出した（母親と話題にする対象としての父親、意図を確認する相手としての父親等）。個人的には、その中でも「一緒のことをして楽しめる遊び相手としての父親」に関するエピソードに注目したい。「F（父親）がブロックの穴に指を突っ込み笑うと、Uもすぐにまねをして喜び、FがやめるとFの手を引いて、再度ブロックの穴に指を突っ込ませて、自分もそれをしては喜んだというエピソード」である。この行動は「大人の手をまるで便利な道具であるように扱う」という意味で「クレーン」現象ではあるが、著者は、Uが「同じことをするというゲームに誘っている点がいわゆる『クレーン』とは異なっている」点に着目し、「Uのイメージを保持する力が

育ってきている」という発達を捉えることに成功している。子どもの育ちをトップダウン的に同定するのではなく、現象に寄り添いながら丁寧な記述の中でボトムアップ的に子どもの生活世界を捉えることで、その子の育ちを確かに描いているのである。そしてそのようにして得られた数々の知見を重ね合わせ、Uくんにとっての父親が、母親とともに話題にできる「共同化された対象」になっていることや、父親の禁止をUくんが内面化するようになっていること、さらには父親の存在が「近接過去」や「近接未来」を含んで広がっていること等を導き出している。また、1歳1ヶ月代に見られ始める「投機的振る舞い」と「グラウンディング」の掛け合いも興味深い。そして1歳2ヶ月代には、ぬいぐるみの仕草を模倣するようになる等、Uくんの身体がことばとして機能し始める。このようにして、Uくんはことばの世界へと突入していくのである。

第3章では、1歳3ヶ月0日から1歳5ヶ月30日までの時期に「Uくんが人称的世界に足を踏み入れていく様子」が描かれている。1歳3ヶ月代から1歳4ヶ月代にかけてUくんは、父親や母親に対する人称詞である「トータン」や「タータン」という語を獲得し（Ⅰ：ジャルゴンの呼びかけ期→Ⅱ：呼びかけ声の減少期→Ⅲ：積極的な教育介入期→Ⅳ：“呼び名”と“(同定的)名指し名”の統合期)、1歳5ヶ月代には「デューチャン」という「自分の名前」ということばを獲得していく。その獲得プロセスの背景には、他者への共感や絵本の主人公の状況理解、他者の姿勢や身体運動を模倣する意識の高まりが見受けられる。また、1歳4ヶ月10日に従兄弟のノリくん（1歳8ヶ月）がUくんの背後から抱きつくという出来事があった6日後、Uくんは友達のマナブくん（1歳2ヶ月）の背後から抱きついている。このような『受動体験（されたこと）』を『能動体験（すること）』に変換することができるようになると、「デューチャン」という人称詞を主体的に用いることができるようになっていく。以上のように、発達プロセスの背景にあるUくんの微細かつ着実な変化を、エピソードを通して顕在化させているのである。

第4章と第5章は、ともに1歳6ヶ月0日から1歳8ヶ月30日までの期間を扱うものの、第4章は

『自分の名前』と自己意識」に焦点を当て、第5章は「広がる内界と外界」に焦点を当てて論じられている。まず第4章では、自称詞に関する先行研究の批判的検討を経て、本書独自の分析カテゴリーを導入した上で、「自称語の用い方」の変化を追っている。その際、自称詞の入った発話数の爆発的増加（1歳5ヶ月：11発話、1歳6ヶ月：68発話、1歳7ヶ月：100発話）という量的な変化のみならず、その過程で、「『自分が（も）それをするのだ』という遂行プラン（意思）を宣言していると解釈」できるプラン宣言や、「他者からそれは自分の物だと主張し取り上げようとする発話行為」である所有主張といった発話が現れるという質的な変化も捉えている。だからこそ、「プラン宣言」や「所有主張」が急増した1歳8ヶ月には、Uくんが「自己を行為主体として意識」し、「“自分（Uちゃん）なるもの”を、自称詞を媒介にして、空間的にも時間的にも能動的に延長し始めている」という深い考察に辿り着けるのであろう。また、「鏡の自己像」理解についても、先行研究を紐解いた上で、Uくんの日誌データから様々な水準での理解の様相を描き出している。ここで着目したいのは、その発達の様相もさることながら、そこで生起する現象に対しての著者の真摯な向き合い方についてである。例えば、鏡の前での「Uちゃんはどこ？」という問いに対し、実物あるいは鏡像の自己を指すという正反応を見せたとしても、「自分の鏡像を『自分』だと分かっての反応だと早とちりしてはならない」と意識的に踏み留まる。それは、「この時期のUくんにとって、『Uちゃん』なることばはある種の物体の名称に近いものだと考えられるから」であり、「Uが『Uちゃん』ということばをどのような意味で理解していくのか、その用い方を考慮して総合的に吟味していく必要がある」と述べているのである。同様に、その現象の真の意味を多角的・多層的に検討する箇所は本書に何度も登場する。目の前の現象をただ恣意的に解釈するのではなく、その現象を多角的・多層的に観ることで、その現象の意味を適切に捉えようとする“真摯な観察眼”が根底にあるからであろう。生活体験という現象と向き合おうとする我々にとって、著者の現象に向き合う姿勢から学ぶことは大いにあると考える。

第5章では、「自称詞という道具を獲得したUが、

どのような内的な世界や関係世界を切り開いていったのか」が詳らかにされていく。自称詞を使いこなす中で、「共同想起」や「役割交替」、「延滞模倣」の力が伸びてくるとともに、エピソード記憶の萌芽にもなっており、「延長された自己」が形づくられ、「自己意識」も高まっていくのである。また、人形を「自己を代理するもの」あるいは「Uのライバルとして」機能させるようになり、親に対しても、駆け引きをしたり自分の主張を伝えたりと、「ある種対等なコミュニケーションの相手になりつつある」様子が描かれていた。まさに、「新たな『自己』なるものが、内側から卵の殻を嘴でつつきつつある」ステージへと突入したのである。

最後の第6章では、1歳9ヶ月0日から1歳10ヶ月30日の時期において、自称詞の用い方に「構造的な相違」が生まれてきたことに言及するとともに、「動詞の種類が急増」し、「自称詞に動詞が接続して用いられるようになった」ことで、「行為主体たる『デューチャン』が本格的に一人称として機能し始めてきている」ことを示している。また、「人形の自称詞として『ボク』」を多様な意味で使いこなすエピソードに寄り添いながら、「人形を主体として操ることができ、もはや自分は赤ちゃんではないと感じる、親と同じようなことをしようとする新たな『自己（自我）』が生まれてきた」ことが述べられている。その「新たな『自己』」がどのような形で姿を現していくのかといった期待感を帯びながら、以降はII巻へと続くこととなる。

読了した私の心に生まれたのは、“私はこれほどまでに多様かつ探求的な「問い」を持ち、多角的・多層的に「観て」、その現象を丁寧に「記述」（素描）し続けることができているだろうか”、さらには“そこに生起する現象を恣意的に捉えるのではなく、その現象と真摯に向き合い、本質を損なわない形で適切に「掴む」ことができているだろうか”という省察である。生活体験へのアプローチは様々な開かれているが、実践を重視する本学会においては、本書のアプローチから学ぶ点が大いにあるのではないだろうか。そして、「現象を記述すること」の意義や具体的な手法などを、実践者も研究者も一緒になって建設的議論を重ねることができれば、本学会での方

法論の更なる習熟にも繋がっていくと考える。改めて私自身も、実践と研究との往還の中で、目の前で生起する現象を“問う”“観る”“記述する”“掴む”といった営みの深化を目指し、子どもの生活体験の

面白さ・不可思議さ・奥深さにアプローチし続けたいと考えている。

[東京大学出版会、2020年、4,800円（税別）]

（北九州市立大学 山下智也）